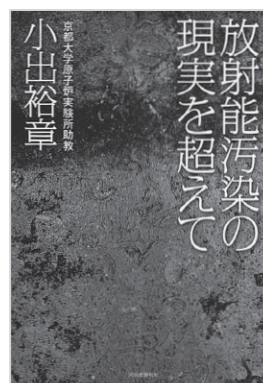


『放射能汚染の現実を超えて』

小出裕章 著 河出書房新社 1,365 円 (税込)

「汚れた環境で生きる以外すべがない」2011年の我々は
原発事故による放射能汚染の問題にどう向き合うか

会員 蔵元 左近 (57 期)



本書の著者は、京都大学原子炉実験所助教として専門家の立場から原子力に関わる問題に一貫して積極的な発言を行ってきた、小出裕章氏である。

本書は、旧ソ連チェルノブイリ原子力発電所の事故とそれによる放射能汚染の問題にどう対処すべきかを主な内容としている。本書は1992年に刊行されて一度絶版になったが、福島第一原発事故を契機に本年復刊された。従って、記載された内容は1992年当時のままである。しかし、本書の目次の一部、例えば、「野菜が汚染された／母乳にまで放射能が／子供たちに集中する犠牲／国の規制値にはまったく根拠がない」等を紹介するだけでも明らかなように、本書においては、原発事故における放射能汚染の危険性——そこには、低線量被曝や内部被曝の危険性も含まれる——が詳細なデータを基に丁寧に論じられており、福島第一原発事故後4カ月（本書評執筆時点）が過ぎても事故処理の問題が収束せず、放射能汚染の深刻性が日々明らかになっている今こそ、多くの人々に読まれるべき内容となっている。

「時間をもとに戻せない以上、私たちは汚れた環境の中で汚れた食べものを食べながら生きる以外にすべがない。」と述べる1992年の小出氏の言葉は、放射能汚染と正面から向き合わなければならなかった2011年に生きる我々に深く突き刺さる。原発推進派・反対派のいずれに属するかにかかわらず、原発事故による放射能汚染の問題に対して自らがどう向き合うかということを考え直す機会を与えてくれるという点で、本書は良書と言える。

なお、小出氏自身が認めているように、本書は著者の文章や講演録をまとめたものであるため、各章の内容や図が重複する点も多いが、私自身はこのことにより、氏の主張のポイントがより明確に理解できたように思う。

本書評を執筆しているのは7月中旬であるが、我が国の政府が福島第一原発事故後から現在までに行ってきた放射線防護策は、国民の生命と健康を守るという政治の本義に照らして、極めて不十分なものであったと言わざるを得ない。本来であれば事故発生当初から、放射性物質拡散予測等の迅速な情報開示、徹底的な除染作業、(農畜産漁業への十分な補償を前提とした)厳格な食品中の放射性物質検査等が予防原則に則って実行されるべきであった。とりわけ、放射線への感受性が高い子供達に対して特に手厚い放射線防護策が迅速に取られなかったことは残念でならない。

子供達には放射能汚染による被害から身を守るすべは無く、我々大人達こそが彼らを守る社会的・道義的責任を負っている。我々が政府に対して今声を上げなければ、我々は将来きっと自分自身を責め続けることになる——本書の中で子供達に対して一貫して温かいまなざしを向けている小出氏の主張の核心は、正にそこにあるように思われる。

* * *

末文となりましたが、東日本大震災及び福島第一原発事故によって被災された方々並びに現在も避難を余儀なくされている方々に、心よりお見舞い申し上げます。